

# 雲南省紅河下流域の少数民族を訪ねて —紅河哈尼彝族自治州を中心に、見聞記—

笹ヶ峰会 濱本 満

## はじめに

雲南懇話会の第7回フィールドワークは、雲南省南東部、ベトナム国境線近く、雲南省紅河下流域紅河哈尼彝族自治州を対象としており、はじめて参加する機会を得た。

紅河は、大理付近に源を発し、ソンコイ河となって、ハノイ沖積平野（トンキンデルタ）を育み、トンキン湾に注ぐ全長1,200Kmの大河である。長江6,300Kmに比較し、中国ではちっぽけな河に過ぎないが、わが国最大の長流信濃川367Kmに比較すると大河である。

その流域には、ベトナム国境線に沿うように、少数民族が生活している。今回は、元陽県の哈尼（ハニ）族、金平県の瑶（ヤオ）・俸（ダイ）族、河口県の壮（チワン）族、瀘西県の彝（イ）族の村を訪ねた。

フィールドワークには、焼畑研究の大家、雲南大学民族研究院の尹教授が同行し、専門的説明を聞くチャンスを得たが、残念ながら、質問を発するに知識なく、所詮、表層を垣間見る観察に終わらざるをえなかった。しかし、観察から多くの示唆を受け、感動した。

その中で、紅河、元陽県哈尼族の棚田、金平県瑶族のゴム林についての感想と疑問（聞き逃したこと）を纏めてみた。

第7回雲南懇話会フィールドワーク行程図



## 紅河

その名の通り赤い河である。赤は、鉄分が含まれるからであろうか？赤い成分は、紅河左岸に位置する牟旧市や蒙自県等から注入されているように思われる。なぜなら、紅河に架かる南沙大橋から見た河の流れは、清流(註1)であったが、その下流に行くに従い、多分左岸からの支流により、次第に赤みを帯びつつ、蔓耗大橋から見た河の流れは、すっかり赤くなっていたからである。(註1；「ヒマラヤ学誌 第11号」p225、写真2「花腰村から紅河を望む」をご覧ください。南沙大橋より遙か上流の新平県辺りの赤土色した紅河である。前田栄三記)

昆明周辺、特に石林県では、赤い大地が広がり、中国科学院昆明植物研究所に在任中の吉野熙道客員教授(AACK会員)に聞くと、石灰岩が分解風化したものとの回答があった。石灰岩が風化するとなぜ赤くなるのか、石灰岩に鉄分が含まれ、酸化して赤い成分が形成されるのであろうか、小生には全く分からないが、司馬遼太郎さんもこの点が気になって、同行の李喬先生に聞くと「鉄分を含んでいるからです」というくだりが「中国 蜀・雲南のみち」にあったし、紅河は酸化鉄で赤く染まっているという記事が多くみられる。石灰岩を母岩とするということで、地中海地方にみられるテラ・ロッサと同質のものか不明であるが、蒙自県の特産品の一つである葡萄と一脈通じるものがあり、興味がひかれた。

この蒙自は、標高約1,300mの広大な盆地に拓かれた新都市で、さながら筑波研究学園都市を大きくしたようでもあり、紅河哈尼彝族自治州の中心都市として役所等が集中的に配備されている。区画整然とした中に、新しい建物が各所で建設途上にあり、中国の活力を目の当たりにした。

蒙自県は、紅河流域の政治・行政の拠点であるとともに、錫等の鉱業製品、タバコ・葡萄・石榴等の農産物の生産拠点でもあり、今後、大きなビジネスチャンスを宿しているようにも思われた。

南沙大橋からみた紅河  
(下流方向)

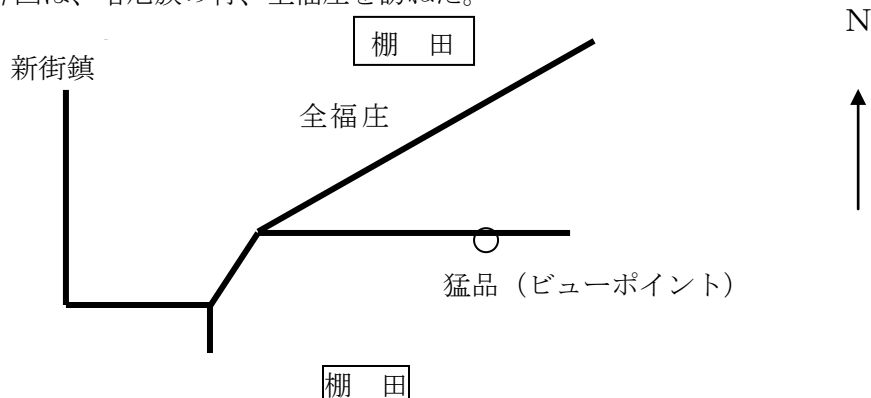


蔓耗大橋からみた紅河  
(上流方向)



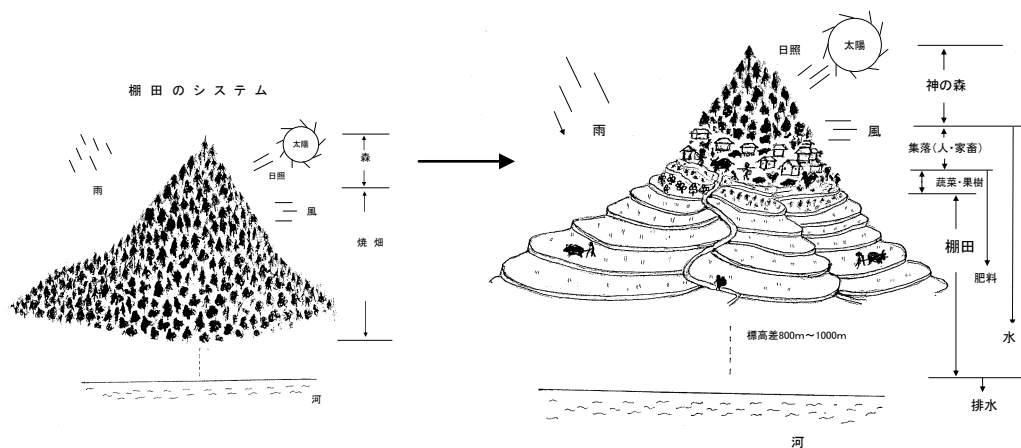
## 元陽県哈尼族の棚田

紅河に架かる南沙大橋（標高約 250m）から新街鎮（標高約 1,600m）まで上り、ここを拠点として、集落部から下方向に、その標高差 700m～800mに及ぶ棚田が広がっている。その規模は、全福庄や麻栗寨から北東面 5,600ha、猛品から南西面 2,760ha に及ぶとされている。今回は、哈尼族の村、全福庄を訪ねた。



尹教授の説明によると、漢の武帝の時代に四川省から移住した哈尼族が、唐代当地に定着し、焼畑により約 1300 年間脈々と棚田を広げ、今尚、シサンプンナやラオス方面で焼畑が続けられているとのことであった。

この棚田は、極めて合理的なシステムとなっている。まず、最高部を神の森として残し、その下の森を焼き、最上部に集落を設け、そこから徐々に焼畑（棚田）を拓く。神の森から供給される豊かな水は、集落の生活・農耕用水となり、人・家畜等の排泄物は肥料となって、漸次、上の棚田から下の棚田へと満遍なく注入され、虫・魚を育み、水鳥が飛来して害虫を駆除し、哈尼族は豊かな稔りを永々享受してきた。3月～8月の雨季に農作業が行なわれる一毛作とのことであり、通年、棚田には水が張られている。これは、人工のダムとなり、このダム機能によって、自然災害は未然に防止される。



棚田の壮観さを求めて、中国本土はもとより、世界から写真家が集まる。棚田は格好の被写体らしく、写真家憧れの場所のようである。工事中の猛品ビューポイントには、夕日の棚田を撮影しようとカメラを設置し、多くの人がシャッターチャンスを待っていた。

哈尼族は、この棚田を世界文化遺産に登録申請中であるが、今のところペンディング状態にあるという。若し、世界遺産になれば、世界中から多くの人々が来訪し、哈尼族が豊かになることは確かである。この例は石林にある。石林カルスト地形が世界自然遺産に登録され、テーマパーク化し、この観光収入により、石林県彝族の人々の所得が倍増し、生活が豊かになったとのことである。なるほど、帰りに立ち寄った石林には、中国本土を中心とした多くの観光客で混雑していた。

しかし、棚田の世界遺産化には、クリアすべき様々な問題があるようにも感じられた。

- ①山上にあるため、多くの来訪者を収容する場所（宿泊所・駐車スペース）が限られており、棚田システムに影響を及ぼさない開発に創意工夫がいること。
- ②自然遺産でなく生きた文化遺産であるため、その維持管理に創意工夫がいること。

棚田システムの中で哈尼族は生活しており、このシステムは日常の生活から生み出されている。哈尼族の生活が豊かになることによって、棚田の維持管理に支障をきたし、このシステムが変容すれば、世界文化遺産の意義はなくなる。豊かな生活と棚田の維持管理が両立が前提である。

こうした問題がクリアされ、世界遺産に登録されれば、棚田は生きた世界文化遺産として、また、エコロジーの観点からも、世界が注目するところとなるろう。



## 金平県瑶族のゴム林

蔓耗大橋で紅河と別れ、途中、金平県棚田（概して急傾斜の棚田が多いが壮観さでは元陽県棚田に引けを取らない）を眺めつつ、南西約 65Kmの所にベトナム国境の街金水河鎮がある。ここは、中越戦争の激戦地で、中国側の戦死者は約 800 名といわれている。

その金水河鎮から北に少し上がった金平県瑶族の白石岩村を訪ねた。この村は、約 100 年前に移住し、5 年前には人口 100 人ほどであったが、現在、戸数 60 戸、人口 200 人に増加したとのことであった。主に、陸稲、粟、キャサバ、大豆で生計をたてていたが、1982 年からバナナ、1987 年からゴムの樹を栽培している。ゴムの樹は、8 年ほどで成木となって樹液の抽出（タッピング）が可能となり、12～15 年をピークに、25～30 年で樹液は減少する。ゴムの樹栽培から約 12 年、日照を避けるため 3:00am～6:00am の早朝、樹液が集められ、庭先に白い塊が無造作に置かれていた。

耕地は、国家と 18 歳以上を成員とする世帯が期間 70 年の契約を結んだ租借地で、その契約面積は一人当り 50～60MU（1MUは 1ha の 1/15、667 m<sup>2</sup>に相当）、その利用方法は個人に委ねられている。ゴムとキャサバの採算性が高く、村長は、ゴムの植林を増やしていきたいとのことであった。又、租借地は、賃貸借に供されて経営規模を拡大する人もいるそうである。しかし、ゴム栽培は、大量の水と、カイガラムシ等の害虫駆除、年 2 回（3、8 月）の施肥（化学・有機肥料）、早朝労働（一人 500～600 本の樹を管理）が必要で、加えて、天然ゴムは、市場の影響を受ける投機性の高い商品のため、市場価格・費用・労働に配慮して経営判断を行なわなければならない難しさがあるとのことであった。

天然ゴムの原産地は、南米アマゾン川流域で、赤道を中心に南北 15 度圏における高温多湿の熱帯雨林であったが、今では雲南省 22 度、サンパウロ 25 度の亜熱帯地方でも植林されている。地球温暖化と関係があるのであろうか。6 世紀頃すでにアステカ文明において天然ゴムが利用されていたといわれているが、1839 年アメリカのグッドイヤーが、天然ゴムに硫黄を加え加熱すると弾性が飛躍的に向上することを偶然発見し、加えて、絶縁性・耐久性に優れていることから、その利用価値が再認識された。これにより天然ゴムの利用が進み、19 世紀～20 世紀にかけて、供給不足から価格が暴騰した。それに目をつけたのが植民地時代の英国で、1876 年、当時のセイロンに、アマゾンからゴムの苗木を移植した。その後、気候条件を満たす東南アジア各地にゴムのプランテーションが造られ、今では天然ゴムの生産は、アジアが 90%を占め、なかでも、タイ・インドネシア・マレーシアの三国で 70%（706 万トン）を占めている。因みに、中国は海南島と雲南省で 53.3 万トン生産し、インド・ベトナムに次ぐ世界第 5 位の天然ゴム生産国である。

天然ゴムの消費は、80%以上が自動車用である。ゴムの世界消費量は、天然ゴム 921.6 万トン、合成ゴム 1,244.6 万トンで、天然ゴムは約 40%を占めている。タイヤメーカーの話だと、天然ゴムと合成ゴムを半々に混ぜて生産が行なわれているそうだが、これは主に大型車のタイヤで、乗用車は合成ゴムの使用比率が高い状況にあるとのことである。中国

は天然ゴム・合成ゴムの生産国であるが、世界最大の消費国であり、輸入国でもある。

天然ゴムの価格は、2002年まで下落傾向にあったが、2002年、中国の自動車生産が急増したのに呼応して、急騰している。中国は世界最大の消費国で、消費量は528万トン、世界の24%を占めている。今後、中国のみならず、インド等発展途上国における自動車需要が増加するのは必定であるから、自動車生産も拡大し、それにつれて天然ゴムの価格も上昇するものと予測される。白石岩村の村長も、こうした将来予測を踏まえ、ゴムの植林に魅力を感じているのかもしれない。

植物は、空気中や土中の水やCO<sub>2</sub>を吸収し、太陽エネルギーを受け、光合成を行ない、栄養分を蓄えて成長する。ゴムの樹も同じだが、その樹液（ラテックス）がどのようにつくられるのか分からない。とにかく、ゴムの植林には、多量の水と肥料が必要であるという。ラテックスは、ゴムの微粒子が水中に分散した乳濁液で、炭化水素、蛋白質、脂肪酸、糖類等で構成されている栄養分であるという。その栄養分が抽出され、加工されてタイヤとなるのであるから、タイヤの成分はCO<sub>2</sub>が炭化したものであろう。丸太と同じである。

タイヤは磨耗し、最後に焼却すればCO<sub>2</sub>は再び空中に放出される。つまり、天然ゴムはカーボンニュートラル（ゼロサム）である。ここが、化石燃料を使用する合成ゴムと異なる点である。但し、ゴムの樹は25～30年で樹液が減少し、成長がストップしてCO<sub>2</sub>を吸収しなくなるので、老木を伐採し、植林更新することが必要である。

合成ゴムは、第二次大戦中、天然ゴムの生産地である東南アジアに日本が進出し、天然ゴム資源を失ったアメリカにより代替資源として開発された。戦後、1959年に日本でも製造が開始され、自動車タイヤ等に利用されてきた。しかし、合成ゴムはナフサから取り出され、化石燃料を原料とすることから、CO<sub>2</sub>を一方向的に放出し、地球温暖化の原因ともなっている。

COP15において予防線を張った中国は、今後の地球温暖化対策として、ゴム植林の助成・拡大により合成ゴムから天然ゴムにシフトすること、伐採も植林も行なわれず放置されているユーカリの植林更新を行なうことによって、CO<sub>2</sub>の森林吸収分をアピールすることも一考に値するのではないだろうか。因みに、マラケシュ合意により、日本は削減枠の約3.8%に相当する1,280万トン・Cの森林吸収分が認められている。

## おわりに

第7回雲南懇話会フィールドワークは、昆明（1887m）から河口（76m）に至る快適な旅であった。雲南省は「四時如春」といわれ、食材が豊富であり、諸所で紅河流域の多様な会食を堪能した。たった15日間で紅河哈尼彝族自治州の概要を知ることは難しいが、充実した日々が送れたと思っている。

最後に、この旅を企画し同行された尹教授をはじめとする雲南大学側スタッフ一同に感謝申し上げる。

（はまもと みつる、 笹ヶ峰会；京都大学山岳部出身者連絡会の略称、不動産鑑定士）